

日本と北歐(スウェーデン・デンマーク)の
「性^{いのち}と生」に関する教科書と絵本を
比較する! そのII

「性を語る会」代表 北沢杏子

■スウェーデン/デンマークの性教育教科書(1~3年生)

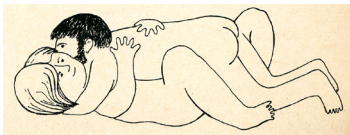


まず、教科書の第1頁目が、この写真——父親があかちゃんのおむつを替えており、母親は新聞に熱中している。この教科書の流れが「新しい生命は、男性と女性の2人が力を合わせてつくる」となっており、ジェンダーの平等を第1頁目に持ってきたのが、日本の教科書と異なる点である。

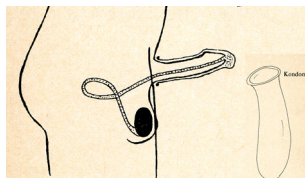
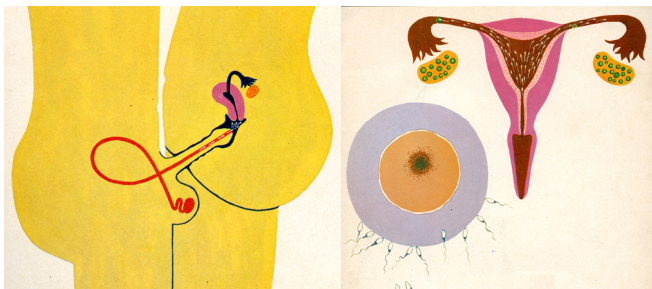


つづいて、「生命^{いのち}の誕生」は、単純な文章とイラストで説明。

①おかあさんとおとうさんが、あかちゃんをほしいときは、こうして、だきあう。



②すると、おとうさんのせいしは、おかあさんのらんかんで、まっていたらんしのそばまでおよいでいって「がったい!」ってするんだ。これが「いのちのはじまり」。



③あかちゃんがほしくないときは、おとうさんがペニスにコンドームをかぶせて、せいしが、らんしのそばまでいかないようにする。

(ペニスにかぶせたコンドームの先に、精液、精子が描かれている)

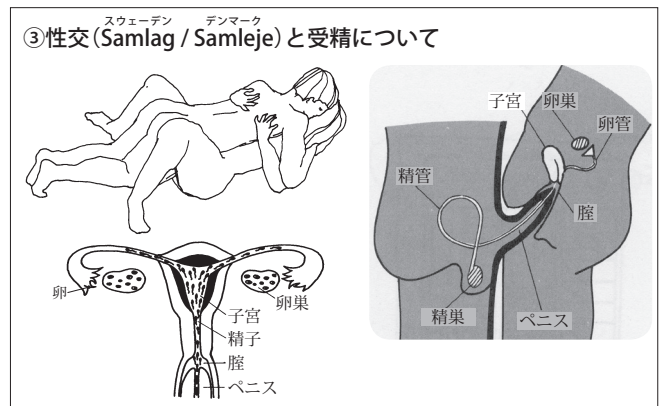
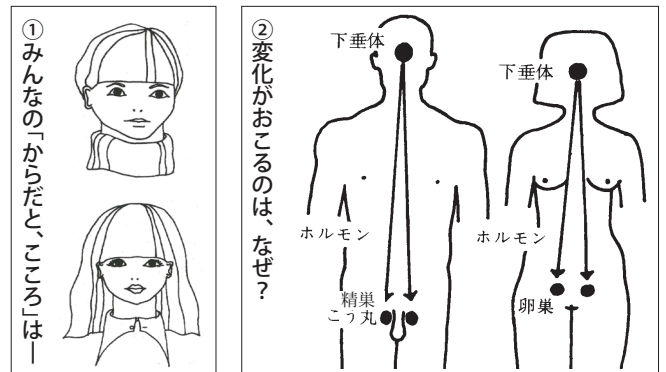
④あかちゃんがほしくても、できないときには、じどうそうだんじょから、あかちゃんをもらってきて、よろしにすればいいんだよ。



そして、養親は、子どもの「出自(アイデンティティ・自己証明)」について、はっきりと話すことが(法律で)決められている——と解説している(子どもの権利条約第8条-1[※])。

※ 子どもは国籍、氏名および家族関係を含む身元関係について、不法に干渉されることなく保持する権利を持つ。

■スウェーデン/デンマークの性教育教科書(小学校4~6年生)
モノクロ——児童が色鉛筆で着色し、各名称を書き込む形になっている。



⑤責任について
子どもに対して、父親と母親は「共同責任」があります。子どもが健全に成長できる「愛情と理解」、「経済的自立」が備わっているか?子どもをつくるのは、2人とも、その自覚ができるようになってからですよ!

冒頭で記述した足立区立中学校の「性教育」の授業は、まず「子どもを産み育てられる状況になるまで性交を避けるのがベスト」と強調した上で、正しい避妊の知識を教えたと答えている。

これに対し、スウェーデン/デンマークの教科書は、15~16歳で恋愛・性交を体験するのは「自然だ」としており、性交・妊娠・避妊・人工妊娠中絶・性感染症予防も含めて、科学的、社会的、人間関係学的に教える——そこが日本と異なっているところだ。

急激に性的成長をしつつある思春期の少年・少女に対し、性交は認めつつ、「子どもを産むことの責任」について、小学校1年生から、小学校高学年への「経済的自立の自覚」にまで言及していることに、「性教育のあり方」の示唆があると、私は思う。